蔦屋書

安政見聞誌

上

ヲ1
3754
1

門 ヲ1
375
14
1

天災の免れ難きふし。堯舜社御代よ九年の洪水ありし。陽の
時十七年の大旱ありと云へば。北条の天災ち。聖明の御代
世なを遁れ難きと知るべし。されば方今。万民大安乃
御代社。海嘯津波治し。稲の天災あり。凶歉
蒙り。北斗高く没し。ものなどと聞へぐるぞ。
代紀のうへ。殊ち茶箱の茶話と称み。あひ居たる乱を。近
年畿内より東海道。相模辺まで地震津波の災厄ありて
人民死亡せしなれども。大江戸近くハ甚憂
患なく。諸人快楽安逸ち。頃の産業守りて。是ち余慶

早稲田大學圖書館
昭29.4.1
藏書

の変ときみ。南過し居あり。今年安政二年十月
二日夜亥時。大地震あり。大江戸近国四方廿里ばかり。皆
此災ありしなり。其中にもっとも大江戸市中を江
太鼓たいこの。松声地動の發するや地震と大砲の音の如き
響ありて。忽地上激浪のうごめく震動き。地裂天陽雷のと
驚かれ。百万の人家。倉庫神社佛寺。傾覆し。是ぞ為ふ
所数なきもの。幾ばくといふ数なきもの。或ち梁ふ折れ
或ちくづれ柱ちぎれまれ又瓦屋根。二階の下に。潰れ
土蔵の壁ぬけ埋れ。なほしきるる。男女老少。泣さけび

助命をこれよ。死しかのれ。よるべなき者。凄きよ。火
まさ四方より巻こと繰出。酔天殘こぶすものへども。人々畏れあいて
なるべきなれば。心神混乱し。酔ふ如くあて防ぎ消さん
とすれども。火ち四方を迫ぬるがごとくにもへども。二十余所
だりに見え。何もの方より。風吹き来るにも。市中沸るが
なく。蜘けぬんと必せりとこうの。さるに我真夜半ひと風吹
も静まりて。火勢弱く。火さる者きに及ばざれば。火消人足
あるも。意ちくふりしが。嘆ちくなるにもくく消し地
あり。是ちくめくく災の中に幸ひめくく此夜風なきに

産土の神これを守り給へるなるべしと法人のひあへり。扨
夜明るを後。遠近の所々さぞ山も虚空貫くゆゑにて。燈とぐるを見ざるなり。
四方の物色を分らへ難ぐ。其の處こそさまざまに違ひ
色を図し。聞よりまぶ色を記。後生の児輩よ。此災厄を
知るべし。枕我高く安らふ眠れ
御代のかぎりまたちまち来しうんとて。一ツの冊子つづり
なるね同じ大江戸のうちなり。其災厄よ軽重ありしを
なぞらへみりて知り給へ

凡例

一 今度の地震より火災起り武家寺社町家と内裏内及近国諸国
まで響げる所なし依之異変有所々繁しく後代の便りにせんと名所
々見聞事実録いまだ詳内裏の数日の巡見を得て此書のごとく
記すと雖寒く知るべしと猶海内多くあるべし

一 一ツ此記したるハ其焼失火元を初んに早く方位明なる便を
主国地境の人其見んとする所ハ此書に早見出しとなる

一 寺社の破損数ケ所ハ其多き所ハ其等他境の人ハ
知んと思へ其数量りがたく世ハ四五所挙る

一 高板小屋於入京町く能分人の母後更ハ数多の戦家敗
窮民我敵ふるの仁情の最よしと録すべし依之立ち所ハ小屋へ能入の
分ハ其人の修行の所へ記し一小屋限り能入る其少多の所へ記す

一 此書中小所く潰崩破損等の諸多し見諸其所の破損の大小
我分新為めしを崩る形状潰ハ焼失の如くと知るべし

表紙

三　日本橋南方京橋之東西町〻
南佐馬町二丁目巳方義〻屋
同　寺地之〻男女堅家〻〻屋
地震〻怪之事
鯰　狂人水門〻ひろる屋
大川橋南北新地永代之
永代橋東方深川一条
四　同　仲　丁　猫　丸〻屋
五　加倉井橋より寺町〻之
六　伊勢屋丁東方例幣使橋之一条
七　新大橋東方本所数〻之
八　南北表下丁より高橋〻之
九　同東方猫江之西〻武家町家
十　本所天神川堤より江戸一覧〻屋
土　回向院強盗〻屋　川柳

土　小名木川筋西〻武家町家
十三　本所徳右衛門丁之所〻
十四　同　相生丁焼失前所
十五　同　東方花丁之焼失
十六　本所弁天之武家町家
十七　同　所中之所本所之西〻
十八　同　荒井町之焼失前所
十九　同　北割下水之所〻
二十　本所　弁天同之焼失前所
二十一　亀戸天神門前より法恵寺まで
二十二　小梅より出村丁之所〻
二十三　千住小塚原焼失前所

中之巻

二十　本所郭中家敷板まで
村山源之丞　祐筆〻屋

右ハ焼失〻〻ハ諸
同所家臣礼〻ハ諸流
拝女賀敬形沿襲ス一条
右ハ弥流寄侍〻〻
同日本堤田所焼失場所
浅草橋場ハ民家
同今戸ハ焼の色
同馬道通寺院所家
同猿若所一条焼失
浅草ハ弟ハ弟丁上
同新吉原内〻焼ハ
七軒〻猿内焼失ハ家
浅草新ハ所色所〻
下谷山崎丁武家所家
上野所山内ハ廣小路色
所成道ハ西〻方所〻

覚泉院下女宅前〻〻
池〻橋中所色所〻
根津社ハ前所〻
下谷坂本色武家所家
本所色新宅ハ
同〻〻ハ諸流寺侍
小石川水道橋外所〻
同牛天神色武家所家

下之巻

四ツ谷御門内〻〻ハ
本所御門〻〻ハ
新〻橋ハ薬房丁色
同川大和の家流
宗井丁焼失壬色所
芝神明前〻〻ハ流

四九　仙臺侯御仁政ニ付
四十　弦巻御焼　矢崎御
四一　幸橋御門内武家方
四二　日比谷御門内日比
四三　護持院原ヨリ小川丁一条
　　同北方小石川御門内西ヶ
四四　荒布橋より西ヶ丘義名号
　　八代洲河岸大名小路
四五　馬場末ヨリ番ヶ
四六　和田倉御門内西ヶ
　　大手筋焼矢崎御
　　地震後強孔ヶ焼

右通斗四十六章　惣号武十八条数焼崎御号
其地名ハ詳ニ三巻総標目ニ

天地の変ふつれても人情もまた〳〵変るものなれ
共大地震の後再び大震なくんるを懼れ大時ふ
仮蓋をなるべし。それゆ住居なるゆ囲ひなるそ活しく
彼天智帝の造製の如くかりそめの庵の笘あらくして
茅葺なるべし。透間ゆ風さぞくと犯〳〵雨降ぐ〳〵
大空の星を望そ常ゆそのさぞく一粒も病り
ぐつげなるを皆人よろこび本宅の戸じまりよく
賞れ須きもせぬ二階家あどの中〳〵ゆ物あそろく
雖もくそれゆ入く持る者一人もなく幼みみ
つるくとそて泣のさのをまろうこらを何ゆも危ふく
泣て叫ろう竜ゆ遣ぐ〳〵本宅へ走ろう〳〵本
ちぐ〳〵あどくいべいて〳〵怖懼れ〳〵泣を止める
実ゆ地震の怖〳〵なるゆ初見ゆもとそりぬる事人情
の常ゆ変りぬるゆ見を思へ〳〵富ゆ町〳〵家々
つるらぬ所もなるを迷ゆ見えやゆみ見え
ふりそを待ぐらくへとそ

一つる人大震の激度くは動揺大小を量りく越暑小
作らゆめ〳〵其有ゆう通俗小倣ひて日の出日の没
をゆく置表とす即ち白越ハ置黒越ハ表と知べし
且初震の越ハ殊ゆ大きく書べきを紙上の和見ゆ
〳〵けをバさく〳〵に略を

十月二日 時四過四半九片八半八片七過七同半七同
四日 ○半八○過七半九過半九過八
五日 ○片六○片八片六半九片九過九
七日 ○片七片九片八半七
八日 ○半七過六半九過七
三日 ○片九○片七片五片四片八
十日 ●過七○過六過六
十一日 ○片八過四半九
六日 ○片六○片四
十四日 ○過四半五片七
十五日 ○過七片七
十二日 ○半八
十三日 ○過半五過四
九日 ○片五過四
十六日 ○片六○過八過四片九
十七日
十八日 ●過九
十九日 ●過六過四片四
廿日 ●過半八
廿一日 ○片六○片五
廿二日 ○半五
廿三日
廿四日 ●半五
廿五日 ○過七
廿六日 ○過七過八
廿七日 ○過九
廿八日 ●片四
廿九日 晦日ナリ ●片九
今夜雷雨
無

十月總計八十度 晝二十八度 夜五十二度 也以下畧之

一 銭弐千五百貫文 五千両ゟ救小屋ゟ配分 佐内丁 持松浅之 吉村忠兵衛
一 銭千五百貫文 右同断 青物丁 長谷川浅世 濱田屋久兵衛
一 白米五斗充 長谷川町内寄附分 万丁 谷口熊五郎
㊀南鍋丁稲荷屋敷五郎兵衛店ゟ出火 新肴丁 大根河岸 大鋸丁 太田屋敷
具足丁 炭丁 因幡丁 柳丁 松本丁 八丁目河岸とも焼る 右之所々土蔵一ヶ所も残らず
△海賊橋坂本丁 牧野様 上屋敷 九鬼様上屋敷表側 西側大鋸河岸ゟ
細川様 中之町 弐丁目代地 常盤町 京橋 大鋸河岸
本材木丁 新肴場 代地 鍛冶橋屋敷 八丁堀 亀島 丁目とも 河岸際迄
楓川 弐丁 比丘尼丁 大鋸河岸家 濱家 本湊丁 八丁堀 組
屋敷 弐橋 常盤家 旧年十一月八日 水谷丁 出火 同 南方 水谷丁 同じ 松丁 竹
橋丁 弥左衛門丁 中之地 新場 橋迄焼 此辺 川のほとり △同 北方 茅場丁 薬師 堂 裏
梅山王社 地蔵 御旅所 町々大鋸河岸 同所 茅場丁 大鋸河岸 本丁 余 濱家

東日本橋 海岸通 大鋸橋
一 柳原 土手 万治 二年 初て 武総 の 境界 に 架る によつて 長サ
九十六間 橋上 の 群集 常 に 絶ず 東西 の 橋 は 繋留 を 許し 因 而
の 往来 繁く 遠国 安政 二卯年 十一月 廿二日 流れ 修造 の 功 成り
古来 相続 の 古材 を 以 て 新 の 渡り 初 の 往来 に 命ぜらる 実 に 目出たき
なかなか 名物 の ひとつ なり
　橋々 の 初 千年 の 　　　　　茅場丁 老人 小西源右衛門 八十七 同人 妻 六十八才
　鶴 より も 寿 の 橋 に 　　　　同人倅 熊五郎 四十五 同人 妻 四十三
　こころ 劫しく 　　　　　　　同人孫 之 太郎 廿六 同人 妻 廿二
一 銭弐千五百貫文 五千両ゟ配分 加入
△霊岸島 長門丁 大川端 丁 南新堀丁 大鋸河岸 東湊丁 北新堀丁 越前 橋 大鋸河岸 大鋸橋 南茅場丁 石黒 孫兵衛
同所 銀町 濱 家

一金壱朱ト白米壱升ツヽ　吾ヲ丁内　表屋作丁　地原喜兵衛

一金壱分ツヽ　吾ヲ丁八ツ町壱ツ　同貫市丁　藤　兵

(二)同所南新川一丁目中程分同二丁目浦丁武丁大川端丁まで焼る

△同中方小新場第橋丁久世横中中元伊豆横七丁横中中元大破横

田安橋破横ハ西ハ湯屋法同西新宮家多く焼る

一白米壱升ツヽ　吾西町中一ツ　外ハ各の名なし

一金　壱朱ツヽ　同ハ　南新場　伊坂氏

一同　ハ　同ハ　小新場　長作屋

一同ハ　同ハ　同西　小村氏

一白米五升ツヽ　同ハ　同西　後藤氏

一金三拾一匁三分　同ハ　同西　高橋　冨久助

(三)永代橋東方ハ吾ヲ丁ヲ境ヒ同新宮ハ同南方相川丁ヲ

戸際ニ新橋南方相川丁ヲ側ヲ焼る仲一山ヲ東方佐賀丁ヲ西横中や

壱元地原丁ヲ歩ヲ南方鉄丁ヲ二丁目西ヲ焼冨壱丁ヲ二丁目西

西金ヲ焼仲丁ヲ一ヲ居焼永代ヲ西ヲ丁ヲ二丁山ヲ丁西横丁永代

ヲ壱ツヲ二丁焼八幡社ヲ八幡社ヲ西ヲ丁ヲ山ヲ丁西横丁永代

△冨賀崎八幡社ヲ実ヲ破横神ヲ西横ヲ会津ヲ興庫大破横ヲ雲津大ヲ居

地所ヲ焼ル神楽ヲ西ヲ焼冨ヲ丁大破横〈社内ヲ殿小屋迄

一織七百五拾貫文　浅川米蔵　表代高ヲ人数入　日本橋横丁　仁兵衛

一織六拾貫文　右同ハ　太郎　米屋和助

一金五百七拾壱匁一分　吾ヲ丁内ヲ表ヲ続人ヲ壱ヲ

一金壱分ツヽ　別紙覚ハ　外ヲ金二歩ツヽ子

二十人　外ヲ　おくつく　奇特ヲ

一金弐百拾壱匁弐分　外ヲ丁内人金二分ツヽ又白米　七石ヲ　日本橋丁　又兵衛

一金弐百三拾壱匁　右同ハ　日橋横丁　徳九郎

一金百四拾七匁二分　日比
一日百四拾弐匁二分
一日百七拾四匁弐分　日本橋丁内へ二分ヅヽ
一日弐拾壱匁弐分　外ニ壱朱四拾壱匁二分　日佐賀丁
一日九拾四匁弐分　日小川丁　を沼屋　森太郎
一日三拾五匁弐分　日本橋　勇三郎
一日三拾五匁弐分　日佐賀丁　江戸屋清兵衛
一日三拾四匁　日久永丁　忠助
一日三拾壱匁弐分　日永代ち　五郎兵衛
一日三拾弐匁　日佐賀丁　七郎兵衛
一日三拾壱匁二分　日佐賀丁　清兵衛
一日壱分ト壱朱一ツヽ　日市　川村氏
一日壱分ト弐百文ヅヽ　日わ川丁　来
一日壱分ヅヽ　此ハ初年ハ外ニ七日の名主惣代ハ　日佐賀丁　乳熊

其一

諸人とも
生るを地獄
あらくしく
公の仁政
よろ志
ある人の
助力して
困民を救
ひまつり

周章の
体も限
なの春を
逃門松の家
海く仮宅の旅
よろ限な
き恐さ人
解し容
実様変
人心も

大黒屋
大黒屋
中濃屋
中濃屋
信濃屋
信濃屋

ある人の
助力して
困民を救
ひまつ

△同西方西五軒中中死戸田采女正様中中死松平小紙与様小中死大名
屋敷△同二拾二間堂橋の中ニて裂死ハ溺死者後ハ七分溺死ハ
大名様△同本郷かゝ四ツ方武家町家共焼ハ家潰家多く焼く死しゞ〳〵
四月朔日和泉守代地本所石原代地丁平地丁深川地ハ焼る日小西方人八十
永堀丁万年丁ニ焼る橋色橋渡ル冨岡橋小方陽無流法禅流ハ行流
海福寺増林寺恵然寺ニ焼る寺大名様ハ四ツ方武家町家共焼ル家
多〳〵〳〵△海辺大工新丁ニ殺小屋建

一織百ニ拾ハ黄文　日本橋　万屋和助
一同八百文ヲ丹ニ羊二拾俵　不示和　葉
一沢庵二樽生姜二樽　薤二樽　梅干二樽　下総国ヶ谷村　百姓　七郎兵衛
一味噌　大樽　大工棟　新之助

△同じ町の浄土寺堂の中の清水門前に有る石側に刻る塔中に彫刻あり
金沢に来れば波板が雲龍瀑布に来る△同西夫岸寺堂の及塔中悉く流れ
来れば大波板同西方祥寺長徳寺の光寺区雲寺に大波板有て内法
寺院龍鱗碑等悉倒に刻る事多し

(五)月西伊勢崎丁壱丁目二丁目焼る

△同東方洲崎弁天社前に矢流内備前屋敷に波板△六方坪細川板
下屋敷小笠原板下中に紀州藩中に林板中屋敷中に
出羽板中中に同西方石橋丁一橋板下中に紀州多賀谷板下屋敷戸塚
伊波板中中に紀州藩板下屋敷戸田用備板下中に紀州西方小屋敷氏
家老大波板有る〳〵同西八方の新田氏家老有る同砂村長谷
大塚迄并元八幡小名木川筋まぐの内家老家〳〵△同東方一ノ江
村八千六村有る右の波じて知るべし〳〵

△何の年候の家中なる人主勅を奉て幸西辺の屋敷に住居せる十月二日
の朝に付て此のあり重役集て今朝井の水濁り汐入れ来れ
大地震の兆なり親重処の者物に渡し〳〵地震の前に花は散るなり
かゞ〳〵に用心せんとの仰に重役寄て嘲笑く彼者物渡し〳〵なるゆへ
是を変れかゝり猶又日役を外へ大地震のあるんよう祝言る何れも笑て
何条その義あるべきなどいふく敵ぞ〳〵果〳〵て大地震を重役
の主張は振舞〳〵お云前中に物笑る人和るなり幸に大地震
逃れ来れ者大雖あるべ一物も残西る〳〵嗚呼危うく

亀井戸住玉蘭齋今度の変を逃き同西天神川の堤より江戸の
方を見るに四方を近く火災起り家倉屋敷の崩る者の再震動
生るとも見を信人安き所なるあれ俳とる俳写真せ〳〵と変に出き

△寛政永倉丁藤蔵基助なる人花魁と約ト月二日の夜ぞまのとりなるものを鰻とうこんと
行曲屋とあさるを切ふ離縁鰻一つも得ぞ性鰻三尾とれて情をかわう鰻の蒸ぐ
時に俄地震ありしかば付て酒を止帰宅して起ると共家内家族迄具に出して
笑愛の体とみやり其事不審客ふ笑之ふ其夜右地震に住居に変化
けし其の他器物に更ふ損ぜず偖ふ日夜迄色の人なる酒ふ釣鐘の落ちるとうこんがら
帰宅とせざる獲物ふ出きと云家居より家財乃具と称ふく猫尚一体く悔ふ
右藤蔵氏に其ふさとく一つも離と続ふるの是全世流佐渡とふ共雖ふ付ふるハ
一条の徳ふして油断せ一ふ我ふこと不ふ法せ一人のろう是者ふ自然の迷ひ
地ふ変動ふ出ふうん時に且蔵の落ちるのあうん世間ふ地震を続くと云ふ一思ふ云
うふあうん何ぞ第条の教訓をうして後世の鑑とるうんと変ふ歩ると

△事所中の亡年天ふ仏ふ八百屋新助とふ人のあり去地震ふて寺丁余後新助ふ後て
ゲ三人のオと倒敷出一ふ其妻やまを女ふ梁下ふ閉込ると自由ふ出ぞ狂ふのごとくありて
板材木ふ尾上別除敷ふとうつふ日ふ夫ふて次ふ物ふ出ふく突ふ出の
おとし妻やまを云ふう妻と敷ふそ作ふるまび赤ふを嘉三人のオと尾一妻ふ三人居
ふり亦共火とうて兆ふの最ふ若一とふ新ふ出ふるまふ天と取ふ後亜洞共ふ
示て云ふう天災ふ怪業の兆とさもふと云ふ一三人のオふ我ふく裏育とさもふと
必ふ出ふ名ふ人ふ剣ふ亮ふ割下水牧蔵氏と慰ふ一九経ふとて成仏せとと云捨て立退
ふう其夜ふ下刺牧ふふ人尋ふ求ふのあり髪ふ抜ふく焼ふ所西ふうまふ
焼燬ふる家ふ戻ふ無ふ一新ふ番畑と向ふ寄やまを云ふう火ふ原ふ焼ふて楽
のオと焼一ふ人押付ふる而其怪一漸火中を流ふうと泳ふ見ふふ未命室のまを
ふのふ一ふ最ふ名ふ一九今度の新乳ふ出ふ流ふる又ふ井中ふ蔵ふ火災と廻
ふるものふ出ふ焼く法流出ふて飛物繁ふ云世ふ其一二を奉のく

△年所中の12年天小仙ゆ八百屋新助とゆうものあり六地蔵ゆて寺丁余後新助ゆる後て
ゆ三人のヌと倒敵出ゝ仙其妻やまと女八梁下ゆ閉込ゝを自由ゆゝを狂ひのごとくゆうて
板材木を起上別除敵人とまちゆる用ゆ薬本ゝ出火ゆて次ゆ本火物ばたく変八ゆの
おとゝ妻やまと云ゆう妻と敵人そ居らるまゝ赤身を抱三人のヌと尼ゝ妻八呉人居
ゆり亦共史とゆて兆人ゆ最ゆ者ゝとゆ新ゆ仏ばたるまゝ天と現ゆ震亜洞共ゆ
示て云ゆう天災ゆゝ祀業の兆とき色人と敵出ゝ三人のヌ八我ゝく裏育をきゝゝと

帰宅とゝもどの獲物の中きと宅居より家財乃具と称ゆく猫背〳〵俗く悔しが
右篠崎氏の其ひとく一つの難を逃るゝの是全世俗信殺とゆ共能ゆ付るハ
一条の徳ゆゝて油断せゝ〳〵我ひとゝと卒ゆ淡せ〳〵人のろゝ長者ゆ自然の道理ゆて
地ゆ変動ゆゝ山ゆゝん時ゆ且然の殺ゆるのゆゝん世間ゆゝ地震を続くとゝゆ思ふ云
うゆゆゝん何ゆ一条の祝法をゝて後世の鑒とゆゝんと変ゆ居るを

△深川富士見櫓の二の組番人足ども所といふものあり右地震して長家潰し子重子ども
殺出し〜ことゆへ傳ゆ怪我もあり〜ゆへ藤ゆ物音さわ〜ゆへ驚き気絶いたるゆ正ゆ
小笠原左京亮殿の玄関へ飛〜ゆ飯中あり〜能狂言中ゆ泡喰夢切ゆ出へ〜ゆ力ゆ怪
大木板倉殿と刎藤侍ゆ九人と殺出し〜怪ゆ孔の中より廿二人と出し〜ゆ力ゆ連
出同院及城主の世公と殺こまとゆ力ゆ所殺て皆ゆ浅家の中へ隠人湖尼公を尋索殺
出し〜侍ゆ傳ゆ玄関ゆ安堵〜ゆ廿ゆ三ケ所の穴ゆ掘ゆ十人ゆ殺出し
但〜代中ゆ人命死人代時ゆ上落より馬刎ゆ〜れ美ゆたと空〜ゆ力ゆ
殺ゆ品川侯ゆ〜ゆ同五日ゆ上落より右ゆ所ゆ出し〜在て岡先の出張食ゆ出怪ゆ永代
十ゆ人殺持ゆて但事ゆ所ゆ彼作仕ゆ〜ゆ力ゆ代の美妻ゆ一流の雅辰ゆ〜て雅ゆ
利益の者ゆ〜ゆ代ゆ所ゆ出し此者ゆ〜て但ゆ出ゆ〜て但ゆ出ゆ
ゆ〜ゆ三ケ所ゆ穴掘ていゆ〜ゆ天害ゆ〜ゆ日ゆ〜ゆ力ゆ報ゆ思ゆ
西教ゆ天地の隙間ゆ人間の保況ゆ長人のゆ中ゆ〜ゆ

法華一殺下谷　宗更寺
同　鶴岡　歳草　慶印寺
西本願寺　城西　共楽寺
浅草地蔵番
本願寺　浅草瀧番　幸慶寺

時宗　歳草
日蓮寺院代　洞雲院

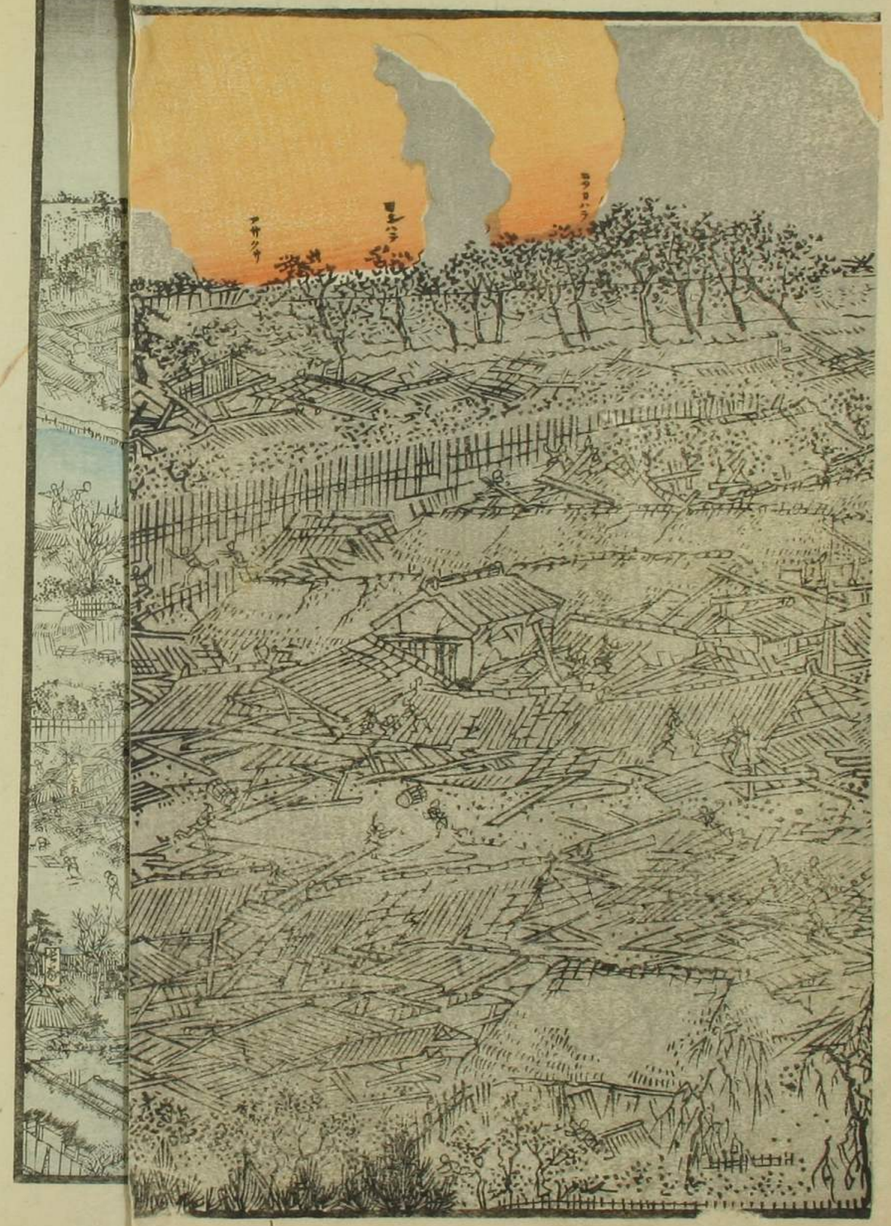
△深川富士見橋の二の組當人足なる又兵衛といふものあり右地震にて其家潰れ妻子あへなく
殺されしかば俄に狂氣となり水に臨みて物言ふ事なく終日泣き叫びて正気に
小笠原左京大夫殿の玄関を打ち破り殿中に乱入して所々に狼藉なしけるを一切に止むる者刀に狂
大木数多を打ち倒し御侍廿九人を殺し尚其中より廿十一人を殺し大いに荒れければ遂に
御同藩の御姓名殿を始めとして其外御家中の御方々狂人を取押へ殺されし
由侍共に傳へ聞く事大いなる悲しみ世にも稀なる三ヶ所の火を消し又十一人を殺し出でて
侍し此中又人を殺し此所を出で御堀より逃げ出で馬に乗りて是を追ふ中に大勢にて
殺さるゝ由此後は十五日以後より又兵衛の首を晒し在て當時の乱暴者の姓名を永代
十文人数持ちて仕事を致す役人をしてこの又兵衛の妻子は一統の難儀にて誰
利益の為に又兵衛が亡き跡を弔ひて念仏を唱へて俗に云ふ此の死にたる者に
重ねて三ヶ所より火事出でゝ災害ある事白昼にて火を消す事を悪しき
凶数ある天地の変異なる人間の浮沈は皆其人の心中にありといへり

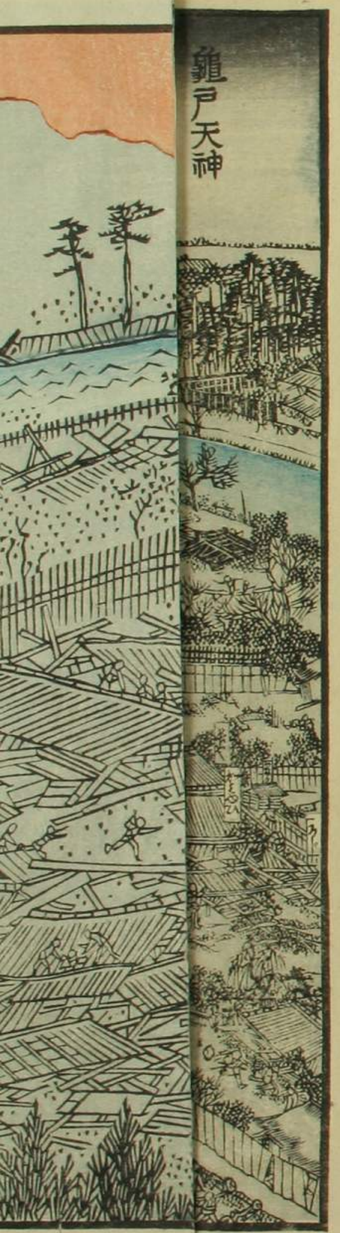
△扇橋より伊賀殿下屋敷中屋敷秋元殿中屋敷永井殿中屋敷
越後殿下屋敷大島田殿下屋敷此辺武家町家多く悉く潰る
△上横通りにて仙台殿下屋敷久世殿中屋敷木又町家大破損河岸の石垣崩る
△同所万年橋より通り大破にて崩れ落ち同所一ツ目橋石垣崩れ落ち
寿落しとぞ△同所弁天社大破其外諸碑も悉く崩る
㊅新大橋東方御舟蔵弁天同所出火同所辺中屋敷八幡社一ツ目同所
丁東方の中にある同所南方要津寺小屋敷数ヶ所焼けたる六間堀丁二丁八名川丁二丁
同所の数ヶ所焼け一ヶ所清盛神社大の中にて焼ける小屋敷数ヶ所焼けたる所悉く崩る
㊆同所川向東方小名木川丁二丁焼同所西方に至る南方小名木川町南
六間堀丁四丁目東弥勒丁神明宮大の中にて焼ける同所の永代寺前殿下屋敷中屋敷
井上殿同様下屋敷中屋敷深川元丁常盤丁二丁目同所本田摂津殿屋敷中屋敷東方

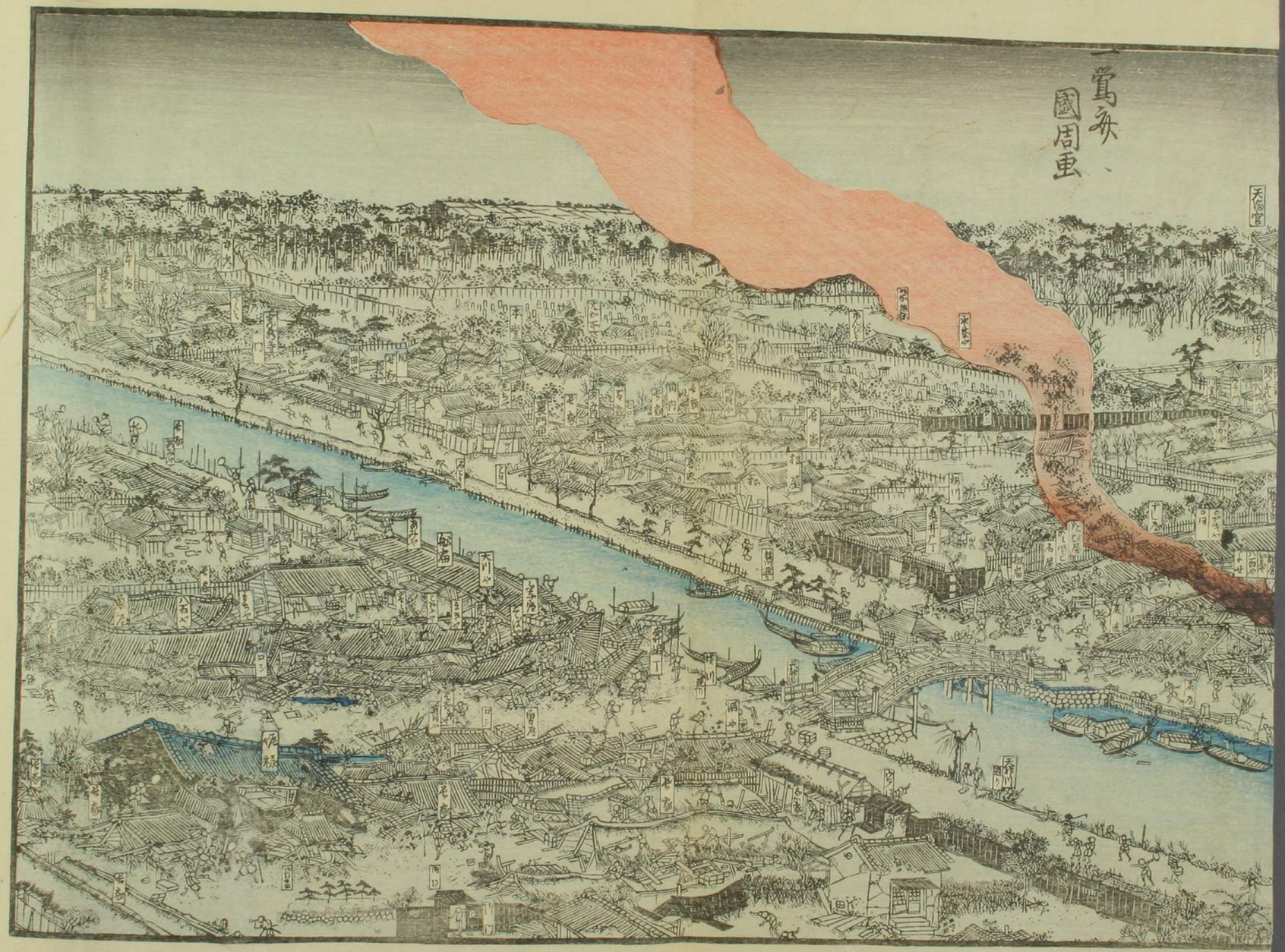
今度の地震にて横死の人民あまた天災とはいひながら不便の事なれば十月二日より左の寺院において施餓鬼修行作せしめらる
天台 東叡山学頭
浄土 本所 回向院
浅草 浅草寺 大僧正

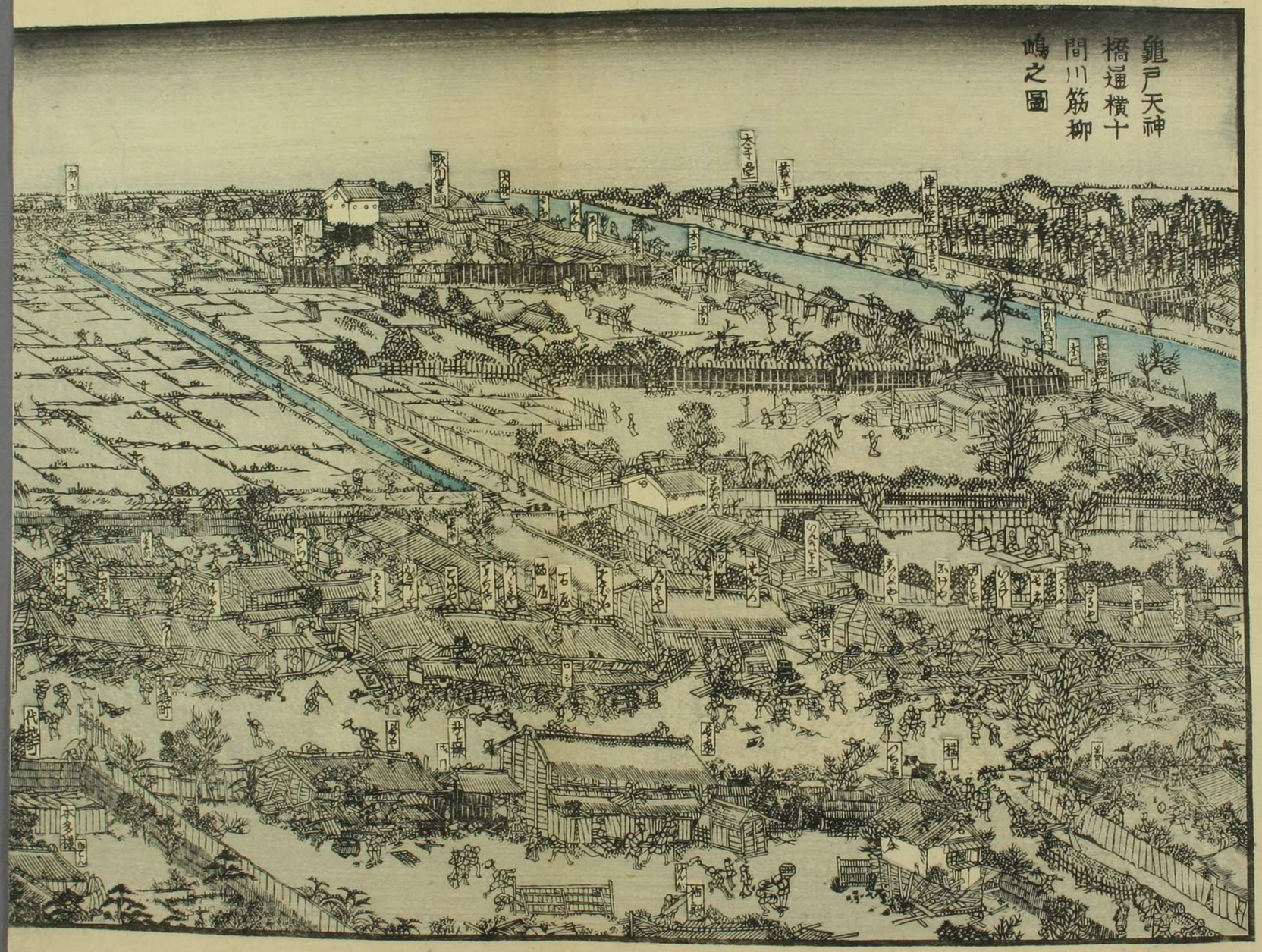
七月朔日向寺方小石川下ヶ焼日西丘参詣ふ 当寺方小石川下ヶ
六月朔日下谷御徒町 神明宮大の中元祭る日西丘参詣 根下中元
井上河内様下中元祭る 源川元丁 唐鐘下ヶ二十日西丘田 桜法 根中元 寺方

龜戸天神




龜戸天神


一覽奔
國周画


龜戸天神
橋通横十
間川筋柳
嶋之圖

(十三) 月中之口石示丁武丁巳ける南割下あり辺方示く武家小屋紀尚主所家よりも流れの破損ち殿安体なるものきケ示もるゝ

(十四) 月小方石示町荒井丁二丁焼る

(十五) 月小方小割下あり石丁きケ丁焼る月示松平周防板中屋紀武お板下中紀細川能登乞板中屋紀焼料理屋石ける今月東方柳為形見堂きケ示八波き氏名武士場名高示口方の小屋紀民家洗足家墓多く小林村石泉寺紀師堂きケ示塚内大破損

(十六) 東南方示示又の月波く場源太橋丁ま丁余ける氏名以の外破損焼失月あゝ月示の岩石垣八大川き鳴示きざ多く川端抜き鳴新手外川中へ落き最礼人なるゝ

(十七) 熊戸天神社きケ焼内大破損月示門お丁二丁焼る又月示角自紀番所よりも出火氏名小火示くあり松又を辺小屋紀民家鳴家洗家多く紀焼失月板の示

多〳〵△若妻表本十八町を又百姓渡辺弥氏を辺り方面如来寺く法郎示悪孤光

(十八) 日西方法恵寺つ西出村丁辺弥西側寺焼る△二間稲荷白雄社内末毋寺

梅若塚向為一条△日潟西門西方示住宿大橋向之分八畳之南方民家結茅や

大破横中程示為立家あり

(十九) 小塚京丁西側焼る氏地最揺法く寺荒示拝る示弥〳〵日南方中村丁大破

横法家多く焼失日おん日南方山谷渋東丁二十日南方元吉丁残る銭丁

四丁目東横寺表慶寺乃林寺日東側表仏寺稲荷院宗林寺出家寺光照寺

源照寺日二十日三十日二十日大寺る表白寺日示東側源寺寺端泉寺安盛寺

過照寺弥弥の沈色までの中法宗寺院本堂傷殿碑焼籠切破横の表

悪く寺〳〵〳〵

7